


| | |
|---|--|
| LIFE 人間と人間の文化について学ぶ | キーワード： 文化の理解 比較鑑賞 体験 伝統音楽 民族音楽 |
| <p>日本と西洋の音楽文化を比較しよう</p> <p>< 配当時間数 14 時間 ></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>日本と西洋の文化の違いを音楽の面からとらえ、「なぜそのような違いが現れたのか」、「そのような違いを生み出した背景にあるものはなにか」を、比較・鑑賞することや実際の体験活動を通して探求する。</p> </div> |  |

1. 単元の目標

世界中の様々な地域には様々な芸術文化が存在するが、その中には似たような要素を持つものや、はっきりとした違いを持つものがある。それらの違いはそれぞれの文化の特質からくるものであり、その文化を生み出した社会の価値観がそこに現れてくる。

本単元では、日本と西洋の音楽を中心とした文化事象を取り上げ、その比較・鑑賞、演奏などの体験活動を通して、「なぜそのような違いが現れたのか」、また「そのような違いを生み出した背景や、社会の価値観の特徴とは何か」を探求することをねらいとする。

さらには、音楽の面から多様な文化的な特徴を理解すると同時に、文化の差異がもたらす様々な音楽の持つ面白さ、素晴らしさを感じ取らせたい。

2. 単元の構成と特色

日本と西洋の音楽文化の違いは様々な側面を持っているので、短絡的に結論づけるのではなく、いろんな角度から考える必要がある。従って、双方の音楽文化もなるべく多くの事例を挙げ、生徒達が様々な面から音楽と文化の結びつきを考えることが出来るよう配慮した。また、普段接することの少ない日本の伝統音楽を扱う場合は、可能な限り専門家を招き、「本物」に接することによって生徒の感性にうったえ、知識のみに終わらないよう心がけた。具体的には全 14 時間を、次のような時間配当で行った。

- (1) 楽譜を通して日本と西洋の音楽文化を探る。(2 時間)
- (2) 合奏形態の違いから西洋と日本の価値観の違いを探る。(4 時間)
- (3) 日本の伝統音楽にチャレンジしよう。～雅楽・尺八・箏～(6 時間)
- (4) 文化の違いによる発声や歌い方の違いを探る。まとめ。(2 時間)

3. 主題に迫るための手だて

西洋と日本の音楽文化を比較するためには、まず、双方の音楽の本質を深く掘り下げなくてはならない。歴史的な背景を知ることも大切であるが、それよりも普段日常的に音楽に接しているながら、なにげなく見過ごしていることへの再発見や、知的好奇心・興味の喚起を重視する。そのためには音源や映像などのソフトを豊富に用意し、資料として様々な場面で提示した。

また、生徒達は日本の伝統音楽に関しては、表面的に知識として知っているにとどまっていたり、さらに西洋の音楽に比べて劣っているものという先入観を持つ傾向がある。そのことが、日本の音楽文化を理解する妨げになっていると考えられるため、日本の伝統音楽の持つ素晴らしさ、西洋の音楽にない特徴に気付かせることが重要である。その手だてとして、卓越した技を持つその道の専門の講師による講義や演奏の鑑賞、さらには講師の指導によって生徒達に実際に演奏を体験させる。その結果、日本の音楽文化の基になる価値観を身をもって知り、西洋の音楽文化を比較する基盤ができるようになるものとする。

4. 単元における評価の観点・方法

- (1) 音楽文化と社会の価値観との関係に対する関心や探求意欲・態度を、探求活動の観察や授業後の感想から評価する。
- (2) 音楽文化とその背景・意味について考えたり、比較の活動を通して理解する能力を、資料をもとに考えた記述や、体験活動後の感想・気付きなどから分析し評価する。
- (3) 自分の感じたことや考えたことを表現する力を、表現活動の様子を観察や、活動後の感想・気付き、まとめの記述などから評価する。

5. 教科等との関係

単元のいずれの内容に関しても中心となる教科は音楽であるが、西洋や東洋、日本の文化を比較するときには、歴史分野の知識や理解が深く関わってくる。また、学習したことを文章にまとめるには国語が関係してくるし、楽器を製作するときは技術、世界の民族音楽を取り上げるときは地理が関わるなど、多くの教科で培われた能力が発揮できる場となっている。



7. 指導のポイント

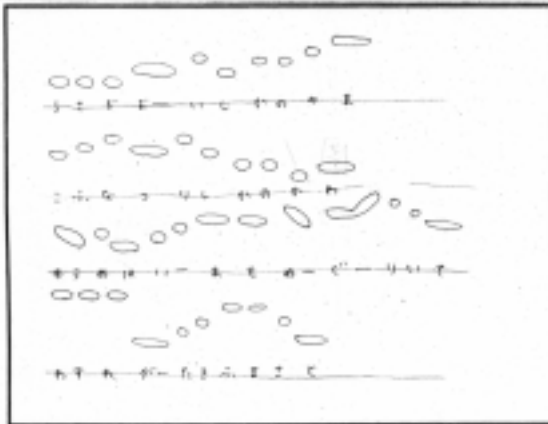
(1) 楽譜を通して日本と西洋の音楽文化を探る。

【楽譜作り】

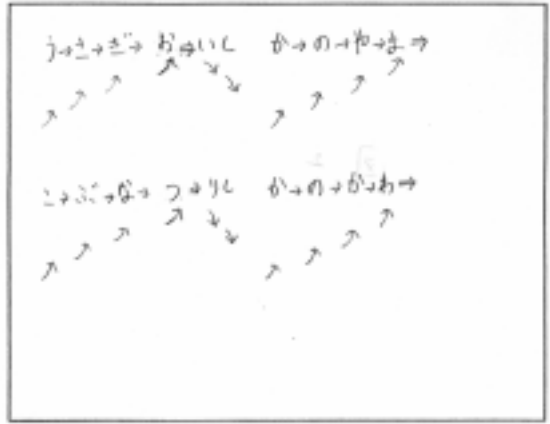
楽譜に対する興味・関心を持たせるため、また、現在の西洋の五線譜ができた過程を逆に辿る方法として「ふるさと」の曲を五線や既成の音符を使わずに、自分で考案して楽譜にするという活動を行う。図形や記号、絵などを用いて各自、苦労して作ったものを紹介する。音楽を記録によって伝えるということが大変難しいものであることが実感できる。

この活動を導入として西洋の楽譜の変遷の内容に入る。

生徒が考案した楽譜の例



【解説、コメント】



【解説、コメント】

↑と下で低さを表し、アとウで高さの変化を表す。

【比較・鑑賞】

西洋の楽譜の変遷や日本の伝統音楽の楽譜の例を示すときには、音楽を実際に聴かせるとともに、関連した楽器があれば実際に見せて音を聞かせる。例えば中世のタブラチュア譜を紹介するときは、リュートという楽器を見せた上で、タブタチュア譜を見ながら「Green Sleeves」のCDを鑑賞する。また、現在ポップスなどで用いられているギターの手譜もこれと同じ原理で作られていることをいう。その他、グレゴリオ聖歌に用いられているネウマ譜を示す場合は、五線譜に直したものとを対比させ、実際に歌わせる。

日本の伝統音楽の例では、箏・尺八・三味線を取り上げ、それぞれ独自の楽譜があることを、それぞれの個性ある音楽との関連において紹介する。その際、箏の繊細な余韻、尺八の多彩な音色、三味線の「さわり」のような雑音を含む音など、日本独特の美意識に基づいた音の世界を強調することによって、(3)の日本の伝統音楽へのチャレンジに繋がっていくと思われる。

第4章 LIFEの事例

【まとめと評価】

楽譜を通して見えてくるポイントとして、西洋の楽譜は、合理性・統一性・普遍性・簡易さを重視しているのに対し、日本の楽譜は、個性・独自性・多様さ・融通性（柔軟さ）を重視し、師匠から弟子への口伝によって音楽が伝えられるという特徴が挙げられる。

生徒がこの単元の学習のまとめをする場合、そこからさらに一歩進み、日本の楽譜が西洋のように緻密な楽譜になると、楽譜にはこめられない様々なニュアンスが、かえって伝わらなくなるという日本の伝統音楽の特質までに思い及んでいるかどうか、評価の観点として捉えられる。

(2) 合奏形態の違いから西洋と日本の価値観の違いを探る。

【指揮者の役割】

指揮者の役割として最初に思い浮かぶのはリズムを合わせることであるが、導入として生徒全員で手を叩く動作を行う。最初は目を閉じて一定の早さで数を数えた後に一斉に手を叩くと、出る音はバラバラで揃わない。しかし、指揮者（合図する者）を前に立たせ、指揮を見て叩くと今度はぴったりと合う。

普段目にしていないオーケストラの指揮者にさまざまな役割があることを、意外と生徒は知らない。そこで、指揮者の岩城宏之著「楽譜の風景」の中から「頭の中のみくりそこない」の部分をプリントしたものを読ませ、指揮者は指揮だけでなく、音楽づくりや、オーケストラの団員達とのコミュニケーションに労力を使っていることを理解させる。そして、著者が演奏会で指揮を振り間違えたというストラヴィンスキー作曲の「春の祭典」のVTRを見せ、西洋の音楽（大規模な合奏形態）において、指揮者がいかに重要な要素を持っているかということを実感させる。

【日本の伝統音楽の合奏形態】

次にそれと対比させて日本の伝統音楽の合奏形態を、歌舞伎の長唄（オペラとの比較）と雅楽（オーケストラとの比較）を例に取り上げ、それらが指揮者なしでどうやって合わせているのか、また指揮者に代わるものがあるならばそれは何なのかを探る。

【比較・鑑賞、評価】

この題目は比較・鑑賞の活動が主となるが、やはり比較のポイント、鑑賞のポイントをしっかりと押さえておくことが必要である。すなわち楽譜と同じく、西洋の音楽は統一性を重視しており、指揮者を中心に一糸乱れぬ演奏が要求される。それに対し、日本の伝統音楽は、ぴったり合わせることも微妙なズレを許容する傾向にある。また、長唄や雅楽のVTR等をよく観察していると、指揮者がいなくても体の動作やかかけ声など全体の雰囲気として演奏を合わせようとしているのが分かる。教師はなるべく結論は言わず、生徒が比較・鑑賞の中から考察していくよう導く。そのような観察を通し、両文化の価値観の違いへとつなげて考えられるかどうか、評価の観点となる。

第4章 LIFEの事例

(3) 日本の伝統音楽にチャレンジしよう。～雅楽・尺八・箏～

【専門の外部講師の招聘】

生徒にとって比較的なじみの薄い日本の伝統音楽は、西洋の音楽文化との対比において欠かすことのできないものであるが、扱い方によっては間違った捉え方をする可能性がある。すなわち「退屈で面白くない日本の伝統音楽より、西洋の音楽の方がずっと優れている」といった見方である。そのような危惧をなくすために外部から専門の講師を招聘することは、日本の音楽文化の素晴らしさを実感として知る上で非常に大きな力となる。

専門家を呼んで授業に参画してもらうことは、予算的な問題を始めさまざまな困難があるが、何より生徒に感動を与えたり、伝統音楽の面白さをうったえる力は非常に大きいものがあるので、あらゆる人脈やネットワークを駆使しても呼ぶ価値は大いにあるといえる。日本の伝統音楽の専門家の方々も積極的に若い世代に伝えていきたいという思いは強く、限られた予算内でも快く協力してくださった。

また、一方的な指導に終わらず、生徒の方からも講師に対して疑問点を質問することにより、それをさらに講師が生徒に返していくという、双方向の高まりが期待できる。雅楽の講師は、生徒から発せられた思いも寄らぬ様々な疑問点に新鮮な驚きを感じられて、授業が終わった後日、「雅楽 Q&A」というものにまとめられて送付してこられた。



4年D組・LIFE-雅楽Q&A-

2014.5.15

Response from Itsumi Sato

1. 雅楽をやろうと思ったきっかけは、
○伝統文化の種、先輩から渡されたもので、その種類も聞いていて、正しい音程に聞こえた記憶が今でもあります。先生の話で決めた。
○「雅楽」の語源は平安朝の音楽にも由来します。
○楽部の特色に魅了されて習っている人一人一人がそれぞれの雅楽の人間力に引きかれて（私ではありません）一人一人が一人一人楽しみながら習っています。
○私の雅楽（楽部）は楽部です。
2. 雅楽を演奏する時に、一番難しい（大変な）ことは何ですか、
みんなの心（心・魂）、音程の揃い（呼吸）の合わせです。
3. 雅楽をする中で、楽しいのはどんな時ですか、
みんなの集中呼吸が合った時が一番うれしい。楽しいのは演奏の最後かな。
4. 雅楽に関する思い出はありますか、
○たくさんありますがその一つとして、楽部の時流の音程（調子のソロ）を聞いてもらったことです。当然、遅らけてはなりました。今でもその時のことを思い出すとゾッとします。内心はバニッパ〜の自分、早急な態度で最初からやり直して演奏しました。
○今回の4年D組の授業も、忘れ得ぬ思い出となります。
5. 演奏する時は、ジャンルとリードする人が必要だと聞きましたが、誰がリードしているのですか、
○楽部や二二が楽部者の演奏です。
○打楽器の響きや音の響きで聞かれます。
○打楽器、笙楽部者のいない時は、管方で打ち合わせをして、後輩のうまい人にお合わせることもあつた。
6. 指導者がいなくて、自分たちでやるのはどうですか、
○5、の答えと同じなのですが、楽部は指導者の助けを借りて、楽部のために頑張って練習をしていますから、まず大丈夫です。
○部分的に聞かせることはあつたと思います。だから練習を聞いていくんです。
7. 演奏中の動きは決まっていますか、
○楽部・楽部、作法（ふるまい）は決まっています。どこの楽部で聞かせるか、楽部の種別、楽部の種別、いろいろと決まっています。
○楽部の楽部にも決まっています。楽部の話し人にも決まっています。
○これが「形」を作ることにもなり、楽部の時間を合わせることもなるのです。
8. 演奏する時も、リラックスしているように見えますが、緊張感を感じないのですか、
○演奏する場所や曲によっては、緊張感にずっと緊張感を感じることもあつた。
○よく聞くと、結構聞いています。楽部の楽部の楽部、楽部の楽部（リード）を聞

第 4 章 LIFE の事例

(4) 文化の違いによる発声や歌い方の違いを探る。まとめ。

【世界の民族音楽の導入～さまざまな歌声】

文化を語る上で異文化への理解も重要な要素である。生徒は知らないもの、理解の及ばないものに対して拒否反応を起こしやすいが、異文化を象徴する民族音楽の中でも歌は最も身近で生徒の感性に訴えやすい。しかもバラエティーに富んで興味を喚起しやすく、世界中にわたって様々な発声方法や歌が存在する。珍しい発声として、モンゴルのホーミー、チベットの声明、エスキモー（イヌイット）の歌、裏声（ファルセット）の例として、ヨーロッパやアメリカのヨーデル、カウンターテナー、変わった合唱形態であるインドネシアのケチャ等々、未知のものへの興味・関心、驚きを呼び起こさせるものが多い。

【表現活動】

この題目では比較・鑑賞とともに重要なのが表現活動である。ケチャ、ホーミーを取り上げるが本格的にするととなると難しいので、入門的な段階にとどめるのが望ましい。

【まとめと評価】

これまでの西洋の音楽と日本の音楽という枠を拡大し、アジアを含めた世界の音楽と日本の音楽という、より広い視野で文化を考えることができているかどうかの評価の観点となる。また、単元全体のまとめを行うために、これまでの学習カード、感想・気付きの記述などを生徒に返し、学習を振り返らせせる。そうして出てきた生徒のまとめと、教師が観察してきた個々の生徒の探求意欲・態度や理解する力、表現の力を加味して評価を行う。

生徒の感想より

- ・ 雅楽や、尺八、箏など普段触れることの少ないものに演奏できるとは思ってもいなかったもので、とても楽しかったし、貴重な体験をした。
- ・ 国と国の文化の違いが、その国の音楽にすごく表れていると思った。
- ・ 世界にはその地域独特の音楽があったり、他の地域と密接に結びついた音楽もあることが分かった。
- ・ 今回の LIFE を受けてみて、今まで気にしていなかった文化についてもいろいろと気にするようになり、音楽に対する関心が深まった気がする。
- ・ 音楽ももちろんだが、文化の違いがあるということは素晴らしいことだと思った。

ボネ島のケチャのパターン